

俺はこの辺りで商売している、いわゆる泥棒って奴だ。  
主に買い物中の女を狙って、そのカバンや懐から財布や金目の物を抜き取っている。  
俺が誰か獲物がいないか探していた所、紅魔館のメイド、十六夜咲夜を見つけた。  
紅魔館には価値のある骨董品が数多く存在していると、泥棒仲間の間では評判だ。  
咲夜さんが身に付けているあの懐中時計も、きつと高価な物に違いない。



【俺】「おらとやめんよ」

【咲夜】「い、いえっ……」

俺は咲夜さんに軽くぶつかって、懐中時計をひったくった。

俺がそのままその場を離れようとした直後、咲夜さんはすぐに異変に気が付いた。

【咲夜】「あ、あれ……？」

懐中時計が無いっ……

まさか、さっきの……」







紅魔館のメイドである咲夜さんは、吸血鬼に仕え、妖精やゴブリンを部下としてしていると聞く。そんな人間がスリに気づかないはずが無いのだ。俺は自分の浅はかさを心底悔やんだ。



【咲夜】「そこの貴方、少し待ちなさい」

【俺】「な、なんですか？ 私に何か御用で？」

【咲夜】「貴方、さっき私の体にぶつかっただ時、何をしましたか？」

正直に話してそれを返すなら、今回の事は不問にします」

本当に不問にしてくれるのだろうか？ 妖怪の餌にされるのではないだろうか？

しかし、しらばっくてもどうせ見抜かれる。妖怪と対等に渡り合う人間に逆らって無事ではすまない。

俺はその恐怖に冷や汗をたらし、懐に隠した懐中時計を強く握り締めてた。

その時だ。不思議な事が起こったのは。







【俺】「ほんの出来心だったんです！ 本当はすみません！ もう二度としません！  
だから妖怪の餌にするのだけはどうかご容赦を……！ つて……あれ……？」

俺が懐中時計を取り出し、咲夜さんに謝罪しようとした瞬間、  
周囲から一切の雑音が消え、咲夜さんが凍りついたように動かなくなった。  
周囲を見れば、街の人達も全く動いていないし、鳥も浮かんだまま止まっている。

【俺】「な、なんだ……？ 何が起こったんだ……？ まるで時間が止まったようだな……！」

時間が止まる。俺はそれを自分で口に出して思い出した。

紅魔館のメイドが妖怪と対等に渡り合えるのは、時間を止める能力があるからだ。

俺はそれを眉唾と考えていたが、実際に時の止まった世界に入った以上、信じざるを得なかった。









【俺】「時間が止まったのは、この懐中時計の能力なのか、それとも咲夜さんの力なのか。どっちかだして、俺にとっては都合がいいや。このまま逃げ……」

俺は逃げようとして、再び咲夜さんの方を向き直った。  
紅魔館のメイドは、妖怪と渡り合う、人間を殺して妖怪の餌にする、  
拳句は時間まで止めると、眉唾物の恐ろしい話ばかり耳にしていたが、  
時間が止まった世界でじっくり観察すると、とんでもない美少女だ。

【俺】「このまま逃げてもいいが、時間が止まってる間はやりたい放題できるって事だよなあ……  
へへっ……こんな美少女、人間はおるか妖怪にも滅多にいねぞ……」

俺は咲夜さんにいたずらをする事にした。









【俺】「さて、まずは咲夜さんの体を隅々まで触らせてもらおうとするが」



俺はとりあえず咲夜さんの体に触れてみた。

時間は止まっているが、心臓は動いているし、体も温かく柔らかい。

時間停止なんて無敵の能力かと思ったけど、この感じだと

特殊能力を持つ相手には中途半端にしか通用しないのかもしれない。

ともあれ、咲夜さんの意識は完全に止まっているので、この方が俺にとっては都合がいい。

【俺】「さて、咲夜さんはどんな下着を付けているのかな？」

俺は咲夜さんのメイド服を脱がせる事にした。







女物の服は構造がイマイチ分からないので、脱がせるのは結構苦労したが、メイド服を脱がせると、セクシーながらも可愛らしい下着が露になった。いくら時間が止まっているとは言え、こんな公衆の面前で女を裸にするのは興奮する。



【俺】「へへっ…エロい下着じゃねえか、メイドさんよ…」

メイド服という障害物がなくなったので、俺は咲夜さんの全身をくまなく愛撫した。靴下ごしにふくらはぎと太ももを愛撫し、下着ごしに胸と股間とお尻を愛撫し、顔を頬ずりし、お腹に顔をうずめ、胸とお尻に顔を挟んで深呼吸した。

【俺】「やべえっ…すげえ良いにおいだぜっ…!」

そして俺はゆっくりと咲夜さんの下着を脱がせて行った。







咲夜さんの懐中時計を手に入れ、それで時間を止め、咲夜さんを二日連続で犯した翌日。俺は次のターゲット、魂魄妖夢に狙いを定める事にした。妖夢ちゃんは白玉楼の庭師で、家事全般もこなすからか、頻繁に人里へとやってくる。美少女ではあるが半人半霊の妖怪なので、必要以上に話しかける人間もいない。俺はそんな妖夢ちゃんに、相談を持ちかける感じで話しかけた。



【俺】「すみません、魂魄妖夢さんですね？」

【妖夢】「そうですが、私に何か御用ですか？」

【俺】「実は村の裏通りに悪霊が出るという噂があつて…。妖夢さんに、悪霊払いをお願いしたいと…」

【妖夢】「わかりました。私でお役に立てるかは分かりませんが、行ってみましょう」

そして俺は妖夢ちゃんを裏通りへ案内した。







時間を止めて咲夜さんをレイブした時は、何も考えず表通りでやってしまったが、あんな目立つ所で時間を止めてレイブしていたら、即座に噂が広まってしまい、博霊の巫女に気づかれて、異変として扱われてしまう可能性がある。しかし、浮浪者と犯罪者くらいしか住んでいない裏通りであれば、巫女や妖怪に関わりのある者も滅多に來ないので、すぐに噂が広まる事もないだろう。

【妖夢】 「まじですか…随分と掃除の行き届いていない通りなのですね」

裏通りの住民は、裏通りにふさわしくない美少女に対して、好奇の視線を浴びせかける。妖夢ちゃんはその視線を特に気にする事もなく、悪霊を探し出そうと周囲に対して気を張り巡らせ、腰の刀へと手を伸ばした。そろそろ悪霊を演出してやるとするか。俺は時間を止めて、妖夢ちゃんの刀を取り上げた。









【俺】「さあで、物騒なモンはその酒樽にでも放り込んでおくか」

俺は妖夢ちゃんから取り上げた刀を、雨水がたまりボウフラのわいた酒樽の中へと沈めてやった。俺はそのまま、止まった時間の中で妖夢ちゃんの体をじろじろと眺める。咲夜さんとは違って、まだ未成熟な感じがするが、それが逆に興奮をそそる。

【俺】「へへっ……さわり心地はどうかな？」

俺は妖夢ちゃんの体に近づいて、妖夢ちゃんの顔に頬ずりしながら、髪の毛の匂いをかいだ。ほんのりとした甘い匂いと、若干の汗の匂いが混ざった、いかにもこの年頃の少女の匂いだ。興奮した俺は、ミニスカートから露出している、白くて引き締まった太ももと、ベストで隠された控えめなおっぱいへと手を伸ばした。









【俺】「うわっ…肌がすっげえスベスベだ…」

俺は妖夢ちゃんの服の上から、その華奢な体を隅々までなでくり回した。直接振られる頬や腕、太ももは勿論、服の上からでも分かるほどの肌の張り。俺はだんだん我慢できなくなつて、妖夢ちゃんの服へと手をかけた。

【俺】「さて、妖夢ちゃんはどんな下着をつけてるのかな？」

俺が妖夢ちゃんの服を脱がしていくと、咲夜さんとは対照的な下着が目に入ってきた。

いや、これは下着というよりは、どちらかというと体操着とブルマのようなものだろう。

しかし、スポーティーな妖夢ちゃんには、色気ういた下着よりも、こういうタイプの方が良く似合う。

俺はブラとブルマに顔をうずめて深呼吸した後、ゆっくりと体操服をずり下ろしていった。









【俺】「へえっ…こう見ると思ったよりおっぱいあるな」

妖夢ちゃんの体は、鍛えている割にはそこまで筋肉質ではなく、年頃の少女よりも若干発育している程度の、理想的な体だった。俺は妖夢ちゃんから取り上げたブラとパンツの匂いをかいだあと、妖夢ちゃんの体に抱きついて全身を愛撫した。

【俺】「やっぱり毛も生えてない少女を撫で回すのは最高だな！  
ほんの少し汗臭いのがたまらないな、ぐへへっ…」

俺の愛撫に合わせて、男を知らない妖夢ちゃんの体が、少しずつ火照り始める。しつとりと汗を浮かせ、乳首が硬くなってくる。

俺はさらに妖夢ちゃんの股間を責めるため、妖夢ちゃんの体勢を変えることにした。





